一八八三年十二月二十四日（月）

秘密の話

ナーラダ　アシタ　デーヴァラ
そしてヴィヤーサ等の大聖者たちは皆
あなたに関するこの真実を認めました
そして今　あなた自身がそれを宣言された
――ギーター 10 - 13――

タクール、聖ラーマクリシュナは境内の北端にある松林(ジャウタラ)で、モニと二人きりで話をしていらっしゃる。午前八時ころ。月曜日で黒分十日目、キリスト暦一八八三年十二月二十四日。今日はモニが師(グラブ)のもとに滞在して十一日目になる。

寒い季節である。お天道(てんと)さまは東の空のすみにお出ましになったばかりだ。松林(ジャウタラ)の西方にはガンガーが流れている。いま満潮なので、北へ向かって流れている。四方は灌木の茂み。程遠からぬところに、むかし師が修行にはげんだ場所であるビルヴァの木立ちがみえる。タクールは東向きになっ

て話しておられる。モニは北向きになり、うやうやしい様子で拝聴している。タクールの右の方には五聖樹(パンチャバティ)の杜と白鳥池(ハンスプクル)がある。寒い時なので、太陽の顔を見て世界が笑っているかのようだ。タクールはブラフマン智のことについて話していらっしゃる。

〔トーター・プリーがタクールにブラフマン智について教えたこと〕

聖ラーマクリシュナ「無形の神も真実(ほんと)、形ある神も真実(ほんと)だ。

ナングタ(トーター・プリー)が教えてくれたがね。サッチダーナンダ・ブラフマンはどんなものか。それは無限の大洋のようなものだと――。上も下も、右も左も、水また水。あらゆるものの根元の水。静かな永遠不変の水が活動するとき、波が立つ。創造、維持、破壊――これが活動だ。

それからこうも言ったよ――考えることが止まったところ、それがブラフマンだと。樟脳(しょうのう)が燃え落ちると、あとには灰も残らない。

ブラフマンは言葉と心を超えている。塩人形が海の深さを測りに行った。戻ってきて報告できなかった。自分が海に溶けこんでしまったから――。

聖仙(リシ)たちがラーマに言った――『ラーマよ、バラドヴァージャたちはお前さまを神の化身だとおっしゃるがね、私らはそうは言わない。私らは音声のブラフマン(シャブダ・ブラフマン)を礼拝している。私らにとっては、人間の姿をした神は必要ではないのじゃ』ラーマは満足げにニッコリ笑ってリシたちのあいさつを受けてから、そこを立ち去った」

〔永遠不変と変化活動――二つとも真実〕

「だがね、永遠なものが変化活動するんだよ。屋根と階段の喩(たと)えのようにね。神としての活動(リーラー)、天神(てんじん)地祇(ちぎ)としての活動、人間としての活動、世界としての活動――。神の化身は人間としての活動をする。それはどんな具合のものかわかるかな？　大屋根からの水がトイを通じてザーザー流れ落ちるようなものさ。あのサッチダーナンダ、あの力(シャクティ)が一人の生きた血管を通して――トイを通るように来るんだよ。バラドヴァージャたちたった十二人の聖仙(リシ)だけが、ラーマを神の化身として認めた。誰でもが神の化身を見分けられるわけじゃない」（訳註、バラドヴァージャ――『リグ・ヴェーダ』の多くの讃歌の作者）

〈タクール、聖ラーマクリシュナは神の化身か？――自ら語られた身の上――ガヤーで見たクディラームの夢――フリダイの母によるタクールの礼拝(プージャ)――マトゥール氏、タクールの内に神を見る――フルイ・シャームバザールで聖ガウランガの様相〉

聖ラーマクリシュナ、続けてモニに話される。

「あの御方は人間に化身して、まことの智慧と信仰を教えて下さる。そうだ、わたしのことをお前、どんなふうに感じている？

わたしのお父さんがガヤーに行きなすってね、そこでラグヴィル（タクールの生家の祭神。ラグ族の英雄、即ちラーマ）が夢に現れて、『自分はお前たちの息子になって下生する』とおっしゃったそうだ。お父さんが、『タクール、私は貧乏なバラモンです。どうやってお前さまにお仕えしたらいいだろう！』

と言ったらラグヴィルは、『大丈夫だよ』とおっしゃったそうだ。

姉さん(訳註1)は――フリダイの母親にあたる人だがね――わたしの足に花と白檀を供えて拝んでいたものだ。ある日、姉さんの頭の上に足をのせて、（マーが）『お前はカーシーで死ねるよ』と言った。（訳註――カーシー＝ベナレスで死ぬことはヒンドゥー教徒にとって名誉なこと）

シェジョさんはこう言った――『ババ、あんたの内部には何もない。神様がいらっしゃるだけ。体は空ろな殻で、ちょうど外からみるとカボチャの形をしているが、なかには果肉も種もないようなものです。いつかあんたを見たら、何者かがベールをかぶって歩いているように見えた』

何でも、前もって知らされる。五聖樹の杜のところでガウランガ（チャイタニヤ）が信者たちとサンキールタンを歌っているのを見た。そのなかにバララームもいたし、それに、お前もたしかにいたと思ったよ。

ガウランガの気持ちを知りたいと思っていた。郷里で――シャームバザールで知らされたよ。木にも塀にも人がたかって、夜も昼もそばに大勢の人がいるんだよ！　七日間というもの、人目から離れ

（訳註1）「ラーマクリシュナの生涯（上巻）」や「LIFE OF SRI RAMAKRISHNA」によると、フリダイの母親はラーマクリシュナの従姉のヘマンギニとなっている。「ラーマクリシュナの生涯（上巻）」に、〝クディラームはヘマンギニをわが娘のように育て、適齢に達したときには彼自身が彼女を、クリシュナチャンドラ・ムコパッダエに嫁にやった〟という記述があるので、ラーマクリシュナはヘマンギニのことを姉さんのように感じていたのではと推察される。

られなかった。それで、『大実母(マーー)、もう結構だよ』と言ったら、やっと静かになった。
もう一度来なけりゃならんだろうよ。だから、みんなに智識を全部やったりはしないよ、ハッハッハッハ。もしお前たちに全ての智識を与えてしまったら――それでもお前たちは今までみたいにセッセとわたしのところへ通ってくるかね、どうだい？
お前のことが分かったよ――お前がチャイタニヤ・バーガヴァタを読んでいるのを聴いて。お前はわたしの骨肉(みうち)だ。一つの実体(もの)――父親と息子のようなものだよ。ここにみんな来ている――つる草の葉のように。一つの場所を引っ張ると、みんなが寄ってくる。みんなが血縁(しんせき)だ――兄弟のようなものだ。ジャガンナータにラカールやハリシュなんかが行っていてそこへお前も行ったら、別の所に住むかい？
お前、ここに来るまでは忘れていたんだよ。今は自分のことがよくわかるだろう。あの御方がグルの姿をして教えて下さるんだよ」

〔トーター・プリーの教え――恵み深い師が尊い自己の本性を知らせて下さる〕
「ナングタが虎と羊の群れの話をしてくれた。一頭の牝(めす)虎が山羊の群れを襲った。猟師が遠くからそれを見つけて射殺した。牝虎の胎(はら)には仔がいて、それが産まれてしまった。その子虎は山羊の群れのなかで大きくなっていった。はじめは母山羊の乳を飲んでいたが、その後すこし大きくなると草を食べはじめた。そして、山羊と同じようにビャービャー鳴いている。ほかの野獣に襲われると山羊といっしょになって一目散に逃げ出す！

ある日のこと、一頭の猛虎が山羊の群れを襲った。彼はびっくり仰天して眺めたよ。だって、山羊どものなかに虎が一ぴき草を食べていて、あまっさえ山羊といっしょになって逃げだしたんだからね！　それで山羊どもは放っておき、その草食い虎をつかまえた。そいつは又、ビャービャー鳴いて逃げようとするんだ！　苦心しながら水際まで連れていった。そして言いきかせた。『この水に映っているお前の顔を見ろ。ソレ、よく見るんだ。おれは鍋のようにまん丸い顔だが、お前の顔もおれと同じだろうが』次に一切れの生肉を口のなかに押し込んでやった。はじめはいぶかって食べようとしなかったが、やがて味をおぼえて肉が好きになった。そこで猛虎は言いきかせた。『お前は山羊どもといっしょに暮らして、あいつらと同じように草を食っていたんだぞ！　この恥知らずめ！』そう聞かされて、若虎はほんとうに恥ずかしいと思った。

草を食うことは女と金にくっついていることだよ。ビャービャー鳴いて逃げるのは世間一般の人間と同じように行動することだ。猛虎といっしょに行くのはグルが霊の意識に目覚めさせてくれることだ。その方にすべてお任せして、その方こそ自分の身内である、とさとることだ。自分の本当の顔を見ることは、尊い自己の本性に気がつくことだ」

タクールは立ち上がられた。あたりはシーンとしている。ただ松林（ジャウタラ）のサヤサヤとゆれる音、ガンジスの滔々（とうとう）と流れる音が聞こえるだけだ！　タクールは鉄柵をこえて五聖樹の杜を通り、ご自分の部屋の方角へモニといっしょに話をしながら歩いて行かれる。モニはまじないでもかけられたような風情で師のあとについて歩いている。

〔タクール、聖ラーマクリシュナ、五聖樹(パンチャバティ)の杜の根元を拝す〕

五聖樹(パンチャバティ)の杜に入ると、例の枝が折れているところに立ちどまり、東向きになってバニヤン樹の台地に額を触れてお辞儀をなさった。この場所は、かつての修行の道場であった。ここでどんなに夢中になって泣いたことか――どれほど多くの神の相(すがた)を見たことか。そして、宇宙の大実母とどれほど話を交わしたことか！　だから、タクールはここに来られた時は、こうして礼拝なさるのではないだろうか？

バクル樹台(タラ)を通って音楽塔(ナハバト)のそばに出た。もちろん、モニもいっしょである。

音楽塔のそばへ来たとき、ハズラーの姿が見えた。タクールは彼におっしゃる――「食べ過ぎちゃいけないよ。それから、気違いじみたきれい好きをやめろ。あんまりキレイ好きな人間は智慧が得られないぞ！　しきたり通りのことをやっていればいいんだ。際限(キリ)のないことをするなよ」

タクールは自室に戻ってお坐りになった。

ラカール、ラーム、スレンドラ、ラトゥたちと共に

食後、タクールは少しお休みになった。今日は十二月の二十四日である。クリスマスの休暇が始まっていた。カルカッタからスレンドラとラームをはじめとする信者たちが次々とやって来た。

時間は午後一時ころ――。モニは一人で松林(ジャウタラ)のあたりを散歩している。ハリシュが鉄柵の近くに立っていて、モニを大声で呼び止めた――「主(プラブ)がお呼びですよ。シヴァ・サンヒターの朗読があるそうです」

シヴァ・サンヒターにはヨーガの話がでている。六チャクラのことについても書いてある。

モニはタクールの部屋に行ってご挨拶(プラナーム)して席についた。タクールはベッドの上に、信者一同は床の上に坐っている。シヴァ・サンヒターの朗読はまだ始まっていない。タクールがご自分で話しておられる。

〔愛の信仰(プレーマ・バクティ)と聖なるブリンダーヴァンの遊戯――神の化身と人間としての活動〕

聖ラーマクリシュナ「牛飼乙女(ゴーピー)たちのは愛の信仰(プレーマ・バクティ)だ。愛の信仰には二つのものがある――〝私こそ〟と〝私のもの〟だ。私がクリシュナの面倒を見なかったらクリシュナは病気になるだろう――これが〝私こそ〟だ。この場合は、クリシュナが神であるという感じは持っていない。

〝私のもの〟――私の、私の、と言うこと。私のクリシュナの足が少しでも痛まないようにと、ゴーピーたちは自分らの幽体を彼の足の裏に置いていた程だった。

ヤショーダーはこう言った――『あんた達の〝愛(いと)しい人クリシュナ〟なぞ知るものか。あれは私のゴパールですよ！』ゴーピーたちもこう言う――『私の恋人はどこにいる！　私の命かけた恋人は！』〝神〟だなんて全然思わないんだよ。

ちょうど子供が、〝ボクのお父ちゃん〟と言うようなものだ。誰かが、『ちがう、君のお父さんじゃない』と言えば――『いや、ボクのお父ちゃんだ』

神の化身が人間活動(ナラ・リーラー)する場合は、人間と全く同じような行動をしなければならない。だから、見分けるのがたいそう難しいんだよ。人間に化身したんだから、何もかも人間と同じなんだ。腹も減るし、

のども渇くし、病気になったり悩んだり、時には恐ろしがったりもする。普通の人間と全く同じ経験をするんだよ。ラーマはシーターを慕ってお泣きなすった。

ゴパール(幼児クリシュナ)は養父ナンダの靴を頭にのっけてお運びなすったり、座台をかついでお運びなすったりした。

劇場では、聖者の役をする役者は聖者のように振舞うだろう。王様になった役者のようにはしないだろう。自分の役柄にふさわしい振舞いをするんだ。

ある役者が七変化をして〝世捨て修行者〟になった。あんまり見事な出来映えだったので、見物の旦那衆が一ルピーを差し出した。その役者は受取らずに首を振って退場した。そして、体も手足もすっかり拭いて普段の服装になって出てきたとき、『さっきの金を下さい』と言った。旦那方が、『え、お前、あれを受け取らなかったじゃないか、何を今さら?』と言うと役者は答えた。『あの時は、世を捨てた修行者の役をしていたので金を受け取らなかったのですよ』

同じように、神も人間に成られた場合は、何もかも全く人間とそっくりな行動をなさる。

ブリンダーヴァンに行けば、神が遊戯なさった場所を沢山見られるよ」

〔スレンドラへの教訓――信者修行者には布施すること。真実を語ること〕

スレンドラ「休みのときに行ってきました。滅多やたらに〝銅貨(パイサ)を下さい〟〝銅貨(パイサ)を下さい〟と言われました。〝下さい、下さい〟の連続でした。説教師たちもほかの連中も――。連中には、『明日、

カルカッタへ帰ります』と言いましたが、もうその日のうちに逃げてきました」

聖ラーマクリシュナ「何てことを！　チェッ！　チェッ！　明日帰ると言っといて今日逃げ出すとは！　チェッ！」

スレンドラはすっかり困った顔付きで――

「森の中で、時々、ババジ（ヴィシュヌ派の出家）たちがひとりで修行しているのを見ました」

聖ラーマクリシュナ「ババジたちに何かあげたかい？」

スレンドラ「いえ――」

聖ラーマクリシュナ「そりゃよくない。修行者や信者たちには何かあげるものだよ。金のある人は、そういう人たちに出会ったときには何かあげなくちゃいけないね」

〔自ら語られる生い立ち――マトゥールと聖ブリンダーヴァンに行ったこと（一八六八年）〕

「わたしはブリンダーヴァンに行った――シェジョさんといっしょに。

マトゥラーのドルヴァ・ガートに行って見物していたら、突然、目に映ったんだ。ヴァースデーヴァ（クリシュナの父）がクリシュナを抱いてヤムナー河を渡って来るのが――。

それから夕方、ヤムナーの岸辺をぶらついていた。岸には小さな草葺きの小屋や大きなナツメの木があった。日暮れになったので、牝牛（めうし）どもが牧草地からもどって来る。見ていると、牡牛がヤムナーを渡りだした。その後から何人かの牛飼いが牝牛について河を渡っていった。

それを見るや突然、『クリシュナはどこだ！』と叫んでわたしは気を失ってしまったよ。

シャーマクンダやラーダークンダを見に行きたいと思っていた。シェジョさんはわたしを駕籠(パランキー)に乗せてそこへ送ってくれた。長い道中だったよ。駕籠(パランキー)のなかにルチやジリピを入れておいてくれた。広い野原を越えるとき、胸がいっぱいになって泣き出した。『なあ、クリシュナ！　お前はいないのに、あの場所は昔のまんまだ！　あの野原でお前は、牛をあそばせていたのに！』

フリダイが道中、歩いて従(つ)いてきていた。わたしは涙が出て仕様がなかった。駕籠(カゴ)かきたちに、〝カゴをとめてくれ〟と言うことも出来なくてさ！

シャーマクンダとラーダークンダに行ってみたら、修行者たちは一人、一人、平べったい小屋のようなものをつくって、そのなかで後向きになって修行していた。人間を見ないようにしているんだよ。〝十二の森〟はぜひ見ておきたい場所だ。（訳註、十二の森――ブリンダーヴァンがある50km四方のヴラジャ地域に点在する十二の森。いずれの森でもクリシュナの遊戯が繰り広げられた所で、今は聖地となっている）

バンクヴィハリー（クリシュナ）の像を見て半三昧になった。わたしは、お像を抱きしめようとしたよ。ゴーヴィンダジ（クリシュナ）の像は、もう二度と拝みに来なくてもいいと思った。マトゥラーに行ったら牛飼い姿のクリシュナを夢に見た。フリダイとシェジョさんも同じ夢を見たそうだよ」

〔女神の信者スレンドラ氏――ヨーガとボーガ〕

「お前たちはヨーガも持っているし、ボーガ（苦楽の経験）も持っている。

ブラフマリシ、デーヴァリシ、ラージャリシがある。ブラフマリシはシュカデーヴァのような人――一冊の本もそばには置いていない。デーヴァリシはナーラダのような人。ラージャリシはジャナカ王だ――無私、無執着の仕事をする。（訳註、リシ――見神者、賢者、聖仙）

女神の信者は正義（ダルマ）と解脱（モクシャ）の両方を成就することができる。その上、富と愛欲（アルタ　カーマ）の苦楽も経験する。

いつかお前が、女神の息子になっているのを見た。お前にはヨーガとボーガの両方がある。そうでなかったら、もっと痩せて貧弱な顔付きになる筈だよ」（訳註、女神――ここではカーリー女神を指す）

〔沐浴場でタクールが女神信者を見たこと――ナビン・ニヨーギーのヨーガとボーガ〕

「一切を捨て切った人の顔付きは痩せていて潤（うるお）いがない。沐浴場（ガート）で一人の女神（マー）の信者を見たが、自分でも何か食べながら女神（マー）を礼拝していた。女神（マー）の子供のつもりなんだよ！

だが、あまり沢山の金を持つのはよくないね。ジャドウ・マリックは現在（いま）、世間の海に沈み込んでいるよ！　金があり過ぎるからだろうさ。

ナビン・ニヨーギー――あの人もヨーガとボーガの両方を持っている。ドゥルガー供養祭のときに見たが、親子二人で女神像を払子（チャマラ）で扇いでいた」

スレンドラ「あのう、私は深い瞑想ができないのですが、なぜでございましょうか？」

聖ラーマクリシュナ「どうしても、マーのことを思い出したり考えたりするんだろう？」

スレンドラ「はい。〝マー、マー〟と称えながら眠ってしまうのです」

聖ラーマクリシュナ「とてもいいことだよ。神を想い出したり考えたりしていれば、それで充分だ」

タクールがスレンドラについての責任を負って下さるのだ。この上彼をして、何を思い煩(わずら)う必要があろうか？

タクール、聖ラーマクリシュナのヨーガの教え――シヴァ・サンヒター

日が暮れてから、タクールは信者たちと共に坐っていらっしゃる。モニもいっしょに床に坐っている。ヨーガについてのこと、六チャクラのことについての話が出ている。シヴァ・サンヒターにこのことは全部のっている。

聖ラーマクリシュナ「イダー、ピンガラー、スシュムナー――どの蓮もスシュムナーのなかにあって、それは霊意識に満ちているんだ。蝋(ろう)でつくった木のようなもので、枝も葉も実も、みんな蝋(ろう)でできている。ムーラダーラの蓮にクンダリニー・シャクティがある。四弁の蓮だ。アディヤシャクティ(根元エネルギー)がすべての人の体のなかにクンダリニーという形で宿っていらっしゃるのだ。蛇がトグロを巻いて眠っているようにね！〝眠れる蛇の形して蓮の底にぞ住み給う！〟

(モニに向かって)信仰(バクティ)のヨーガによって、クンダリニーは速く目覚めるんだよ。これが目覚めないかぎり見神はできない。精神(こころ)を集中して歌って――、一人になって――、秘密に――。

目覚めよ　母なるクンダリニー！

君、永遠の歓喜(よろこび)よ！
眠れる蛇の形して
蓮の底に住み給う

歌によってラームプラサードは完成した。心をこめて熱心に歌えば見神できるんだ！」

モニ「はい。こういうことを一度経験しますと、心の悩みは消えてしまいますね」

聖ラーマクリシュナ「アハー！　たしかに悩みも悲しみも消えてしまうよ。お前にヨーガのことを、少しばかりザッと教えてやらなけりゃね」

〔グルがすべてを――修行を完成――ナレンドラは生まれながらの完成者〕

「わかっていると思うが、卵の中のヒナが充分大きくならないと、母鳥は殻を壊さない。時が来れば鳥の卵はかえる。

だが、少し修行をすることは必要だ。グルが何でもして下さるが――。でも、最後のときは少し修行をさせる。大きな木を伐り倒すとき、回りをほとんど切ってから、ちょっと脇へ退(の)いて立っている。すると、木はモリモリ音をたてながら自然に倒れる。

溝を掘って水を引くとき、さいごにごく僅かの部分を掘り残して脇に退(の)いている。すると、残った土は水を吸いこんで自然に崩れ、河の水がサラサラと溝に流れこんでくる。

我執、制限(ウバーディ)、こういったものをみな放して捨てたら神様にお会いできる。〝私は学者だ〟〝私は何某(なにがし)の息子だ〟〝私は金持ちだ〟〝私には身分がある〟――こういった制限(ウバーディ)を捨てると神が見える。

神は真実在、他はみな無常なもの、世間ははかない空しいもの、これが識別だ。識別ができなければ教えの核心はつかめない。

修行をつづけていると、あの御方の恵みによって成就する。少しは苦労もしなけりゃならんよ。その後でこそ、悟りと歓喜がわがものになるんだからね。

どこかの場所に黄金がいっぱいつまった壺が埋まっていると聞けば、人は走っていって探し始める。あっちこっち掘って探していると、頭や顔に汗が流れてくる。さんざ掘り返したところで、ある場所でシャベルが〝カチン〟と音をたてた。シャベルを投げだしてよく見ると、それが壺だ。壺を見つけて踊りまわって喜ぶ。

さて、壺を取り出して金貨をあけ、手にとって数えたりしてまた大喜びだ！　見る、触る、喜ぶ！　どうだい？」

モニ「ほんとに、おっしゃる通りでございます」

タクールは少し沈黙しておられる。やがて、再びお話しになる。

〔わたしの身内は？　――エーカーダシーのすすめ〕

「わたしの骨肉(みうち)は小言を言われてもまたやってくる。

アハー、ナレンドラのあの性格！　以前に大実母カーリーのことを好き勝手に言うから、わたしはある日イラついて、こう言った――『ナラズ者め、もう二度とここへ来るな』そうしたら彼はゆっくり部屋から出て行ってタバコを吸い始めた。骨肉のものは叱られても腹を立てないよ。どう思う？」

モニ「はい。おっしゃる通りです」

聖ラーマクリシュナ「ナレンドラは生まれながらの完成者だよ。無形の神を固く信じているんだ」

モニ「ははははは。来ると必ず何か事件がおこりますね」

タクールは嬉しそうに笑ってこうおっしゃる――

「全くその通り、事件がおこるよ」

＊　＊　＊　＊

一八八三年十二月二十五日（火）

翌日は火曜日で十二月二十五日、黒分十一日目。午前十一時ころ――。タクールはまだお食事前である。モニとラカールその他の信者たちはタクールの部屋で坐っている。

聖ラーマクリシュナ「（モニに向かって）エーカーダシーをするのはいいことだ。あれで心はとても清まるし、神への信仰も深まる。そうじゃないかね？」（訳註、エーカーダシー――新月および満月から十一日目、信者は一日の全部または一部を断食し、祈り、礼拝をして過ごす）

モニ「その通りです」

聖ラーマクリシュナ「コイ(ポン菓子のような食べ物)と牛乳くらい食べてもいいだろう――どうだい?」